

## Documents by N. P. Rezanov as a resource for the historiography of dialect

KOMABASHIRI Shoji

### Abstract

To date it has been thought that two sets of documents written by N. P. Rezanov at the beginning of the 19th century were a record of the Ishinomaki dialect prevalent in the area around Sendai, due to the fact that the person who taught Japanese to Rezanov – the castaway Zenroku – was from Ishinomaki itself. However, a consideration of historical materials that shed light upon the process by which, and the conditions under which the Rezanov documents were produced makes it clear this conclusion cannot be drawn with as much confidence as has heretofore been assumed.

Through his use of texts published in Japanese, as well as by means of his association in Irkutsk with castaways from Ise Province, it is conceivable that Zenroku had acquired some degree of fluency in a more standard form of Japanese. As a result, we must keep in mind the possibility that the Rezanov documents may not be straightforward historical records of the Ishinomaki dialect, but rather records of Japanese as used by a speaker that dialect who nevertheless would have had more standard Japanese in mind while teaching.



# レザノフ資料と方言史研究

駒 走 昭 二

## 1. はじめに

1804年、ニコライ・ペトロヴィッチ・レザノフ（1764～1807）が、ロシア皇帝アレクサンドル1世の親書を携え、長崎に来航したことはよく知られている。第2回ロシア遣日使節である。この使節は、遡ること12年の1792年にアダム・キリロヴィッuchi・ラックスマン（1766～1803頃）と江戸幕府との間で交わされた約束に基づき、日露間の通商関係樹立を実現することがその目的であったが、それに加え、ロシアに漂着していた日本人漂流民を日本に送還する役目も担っていた。その漂流民とは、1793年に仙台石巻から出港し、翌年、アレウト列島（アリューシャン列島）の小島に漂着した若宮丸の乗組員、津太夫、左平、儀平、太十郎の4名のことである。若宮丸には、出港時16名の船員が乗り込んでいたが、途中で亡くなつた者、ロシアへの残留を選択した者も多く、帰国を望んだのは、この4名のみであった。また、この遣日使節は、アーダム・ヨハン・フォン・クルーゼンシュテルン（1770～1846）の世界一周航海に同行したものであったため、彼らに伴われた津太夫一行は、奇しくも初めて世界一周を成し遂げた日本人としても歴史に名を残すことになった。彼らがロシアで見聞したこと、帝都ペテルブルグから、大西洋、太平洋を経て帰国するまでの経緯は、後に、蘭学者大槻玄沢の聴き取りにより、『環海異聞』、『北

邊探事』としてまとめられている。

ところで、この漂流民たちを伴った日本までの長い航海の間に、レザノフは、日本語に関する2冊の書物を著している。『Руководство къ познанію японскаго языка содеряще азбуку, первоначальныя грамматическія правила и разговоры』（アルファベット、初級文法と会話を含んだ日本語学習の手引き。以下『日本語学習の手引き』）と、『Словарь японского языка по Российскому Алфавиту собранный』（ロシア語のアルファベット順に編集した日本語辞書。以下『日本語辞書』）である。本稿では、この2冊の書物をレザノフ資料と称することにする。

このレザノフ資料の作成には、ロシア残留を選択しながら、レザノフの通訳として、航海に同伴していたもう一人の若宮丸漂流民、善六が協力したと考えられている。従って、レザノフが記した日本語には、善六の言葉、すなわち仙台石巻地方の方言が反映されていると考えられ、これまで研究が進められてきた。日本語の史的研究は、資料的制約により、やむを得ず中央語の歴史に偏らざるを得ないが、このような過去の方言を知ることのできる資料はたいへん貴重である。しかもキリル文字という表音文字によって記された本資料は国内資料よりも、その精密さにおいて復元性が高く、18世紀後期の当地の方言を知る上で、また、方言まで含めた日本語全体の歴史を概観する上で、重要な意味を持つものと言える。

ただ、筆者は、本資料の方言史資料としての価値は十分に認めつつも、純粋な石巻方言資料として扱うには、やや慎重な姿勢が求められるのではないかと考えている。現に、江口泰生（2010）では、本資料における母音無声化や、カ・タ行音有声子音化の表記傾向から、当時の石巻方言が必ずしも反映されていない可能性があること、中央語形が混入している可能性があることが指摘されている。

本稿は、レザノフ資料が作成された当時の時代背景や編纂環境等を検討

することにより、そこに記された日本語の性質を再確認しようとするものである。そうすることによって、本資料の石巻方言史資料、また日本語史資料としての価値がより明らかになるのではないかと考える。

## 2. 編纂状況と編纂過程

レザノフ資料の日本語がどのような性格を帶びたものであるのかを再検討するために、まず、本資料がどのような状況でどのような過程を経て作成されたかを確認しておこう。

両書にはいずれも1ページ目に、レザノフの署名とともに「ロシア人による世界一周旅行の途上、ナデジダ号の帆の下で」との記述があり、また、『日本語辞書』には、

我らロシアの臣民は皇帝陛下の御意志のもと、目下、日本帝国の通商を調査するために航海を続けておりますが、同時に、この国の言葉を陛下の御代において初めて世に紹介しようとするものであります。航海中に私が編みました日本語の辞書および日本語の文字と文法の手引きを陛下に謹んで捧げる次第であります。私は同行した日本人たちより日本語を学びましたが、彼らは庶民階級の人間であるため、抽象的な概念を表す言葉は彼らの理解の外にあり、そのため私の仕事も完全なものとすることはできませんでした。しかし、もし私の仕事がたとえわずかでも学問と通商にとって有益なものとなるのであれば、私の労力はそれだけで十分に報いられるものであります<sup>1)</sup>。

という序文もあることから、本資料は、レザノフが日本人漂流民から習得した日本語を、航海中のナデジダ号の船上において作成したことは間違い

あるまい。

では、そのナデジダ号の船内はどのような状況だったのであろうか。当時の記録から探ってみることにする。

### 3. ナデジダ号でのレザノフと善六

#### 3.1 レザノフとクルーゼンシュテルンの対立

ナデジダ号には、二人の指揮官が同乗していた。一人は海軍出身の艦長クルーゼンシュテルン。そしてもう一人がアレクサンドルI世の国書を携えた遣日大使レザノフである。もともと通商交渉や漂流民の送還とは一切関係ないところで、ロシア初の世界一周探検を企画し、その指揮をとることになっていたクルーゼンシュテルンにとっては、国家の政治的判断により遣日使節を帯同することになり、さらにその探検隊一行の総責任者としてレザノフが皇帝から指名されたことは不本意だったようである。世界一周の航海中に二人が激しく対立していた様子を各種史料から知ることができる<sup>2)</sup>。そしてその対立は二人の指揮官同士の1対1の対立に留まらず、クルーゼンシュテルンに採用され、その配下にあった大勢の乗組員たちと、航海についてはまったくの素人である総責任者との対立でもあったようである<sup>3)</sup>。その対立の激しさは、カムチャツカのペトロパヴロフスクに到着した際に、レザノフが航海中のクルーゼンシュテルンたちの反抗的な態度を、当地の警備司令官P.I.コシェレフに告発した文書<sup>4)</sup>や、科学アカデミー総裁N.N.ノヴォシリツエフに宛てた書簡<sup>5)</sup>等からうかがい知ることができる。それらの文書の中で、レザノフは、海軍士官たちのことを「荒れ狂った者ども」と表現し、彼らが「船で暴動を起こし」たこと、そして、自分が「筆舌に尽くしがたい侮辱に耐え」てきたこと等を綴っている。

長い航海の間を、孤立して過ごしていたレザノフの姿が想像されるので

はなかろうか。このような人間関係の中で、レザノフは本資料を編纂したのである。

### 3.2 漂流民たちの対立

しかし、このような対立は、ロシア側の人々の間だけで起こったのではなかった。また、航海中、孤立状態にあったのもレザノフだけではなかった。日本人漂流民たちの間でも同様の対立と孤立が生じていたのである。帰国組4人と、ロシアに帰化した善六の対立である。善六は、既にロシア正教の洗礼を受け、名をピョートル・キセリヨーフと改め、ナデジダ号には、日本語通訳官14等文官として乗船していた<sup>6)</sup>。帰国組4人からすれば、帰国することよりもロシアに残ることを選択し、ロシア側の役人として乗船している善六の存在は快くなかったのであろう。航海中、激しく対立していた様子が、レザノフが記した文書やクルーゼンシュテルンの航海日誌から伺える。その激しさは、善六の身に危険が及ぶことを恐れたレザノフが、通商交渉の場となる長崎へ彼を連れて行くことを途中で断念し、寄港地ペトロパヴロフスクで下船させることを決断せざるを得ないほどであった。その辺りの様子をレザノフがアレクサンドルⅠ世に送った上申書から見てみよう<sup>7)</sup>。

私とともに出発した日本語通訳の十四等文官〔参議会記録員〕キセリヨフ〔善六〕も私はイルクーツクに帰還させねばなりません。旅行中はたえず、日本人たちは彼と喧嘩を続け、最後にそれは激しい敵意と憎悪へと変わりました。キリスト教信仰を受け入れていることのみならず、祖国に対して背信的な助力をしていることで、彼が見せしめとして処罰されるようにと、日本人たちは彼を呪っていました。彼らが敵意を持ち始めてすぐにこの不快な出来事に気がつき、私は日本語

を習得せねばなりませんでした。今ではこの通訳の助けなしで済ませ、もしも日本人による頑固な慣習の遵守が、将校の官位を有する通訳の処罰に着手するよう彼らを決意させたのであれば、日本語を習得することによってロシア帝国の威儀に対する侮辱を取り除くことができればと願っております。

ロシア帝国の役人である善六が日本で処罰されるようなことがあれば、それはロシア帝国にとって侮辱的であり、それを避けるためには彼を日本へ連れて行くことを断念せざるを得ないとレザノフが判断したこと、また、それに伴って、自分が通訳なしでも交渉に当たれるよう日本語を習得しなければならないとレザノフが決意したことがうかがえる<sup>8)</sup>。日本人同士の対立がレザノフの日本語学習を促進していたということは興味深い。そして、それほどまでに善六と他の帰国組4人が激しく対立していたということにも、ここでは注意しておきたい。

### 3.3 インフォーマント

上記の上申書の中で、レザノフは善六の行為を「背信的な助力」と表現しているが、これはレザノフへの協力すなわち通訳官としての彼の仕事を指すのであろう。同胞から「敵意」「憎悪」を抱かれるほどの、善六のレザノフへの献身ぶりがうかがえるのではなかろうか。また、レザノフは善六に対して絶大な信頼を寄せていたと思われる。レザノフは、シベリア総督への手紙の中で善六の行動を「いつも称賛に値するもの」と評し、ペトロパヴロフスクに彼を残すことを「私にしてみれば、必要な人間がいなくなってしまうのがとても残念でしかたがありません」と嘆いている<sup>9)</sup>。

ナデジダ号の中で孤立するレザノフと善六。そして孤立した者同士がお互いに信頼し合っていた様子が浮かび上がってくる。クルーゼンシュテル

ンも、自身の日記の中で、同じく船中の日本人同士の争いについて記述しているが、「使節がこの通詞（善六 — 筆者注）に對して彼等（帰国組4人 — 筆者注）に對するよりも親しくするの故を以って、彼等はしばしばこの通詞を罵り、之に復讐すべしと怒號して居た。」<sup>10)</sup>と、争いの原因が使節すなわちレザノフと善六の親しさにあると見ている。

レザノフは、前述したとおり、『日本語辞書』の序文で、「私は同行した日本人たちより日本語を学びました」と記しているが、船内での様子から判断すると、彼が日本語を学んだ「日本人たち」とは漂流民全員というよりも、実際にはほとんどの場合が善六からであったと思われる。そして、その学習方法も、漂流民たちの日常会話の観察によるものというよりも、主に善六への聞き取り、そして善六からの教授によるものであったと考えるのが自然であろう。実際に、『日本語辞書』に記載されている単語を冒頭から眺めただけでも「Авосьлибо! (多分)」に対する「Ооката! (オオカタ)」や、「Адъ (地獄)」に対する「Дзинконку (ディンコンク)」、「Актюбръ (俳優)」に対する「Шибаяно якуша (シバヤノ ヤクシャ)」など、日常会話の観察からは得られないような単語が数多く見られる。また『日本語学習の手引き』には、ある程度体系的に整った文法規則や、連続性のある基本会話が記載されている<sup>11)</sup>が、これらを、一方的な観察で理解したり、書き留めたりするのは困難かと思われる。

要するに、レザノフ資料に記されている日本語の大部分は、個別の聞き取りによって採集されたものであり、また、そのインフォーマントは、ほとんどの場合において善六個人であり、他の漂流民はそれほど関与していなかったのではないかと推定されるのである<sup>12)</sup>。

## 4. イルクーツクでの漂流民

ところで、仙台漂流民たちは、1794年5月にアレウト列島の小島に漂着した後、ロシア人に保護され、オホーツクやヤクーツクを経て、1796年にイルクーツクに移動させられている<sup>13)</sup>。

イルクーツクには、当時、二人の日本人が暮らしていた。1783年にロシアに漂着した伊勢の神昌丸<sup>14)</sup>の乗組員で、ロシアに帰化し、そのまま当地に残っていた庄蔵と新蔵である。彼らは、勅令に従い、1792年から当地の国民学校でロシア人子弟に日本語を教えて暮らしていた<sup>15)</sup>。

日本ではおそらく出会うはずのなかった異なる地域の船乗りたちが、漂流という災難により、遠い異国の地イルクーツクで出会ったのである。

### 4.1 伊勢漂流民と仙台漂流民

二人の伊勢漂流民にとって、ロシアへの残留は不本意なものであった。滞在中のイルクーツクにおいて、庄蔵は酷寒のため足が凍傷にかかり片足を失い、新蔵も熱病にかかり全快は望めない状態となっていた。二人は、実現するかも定かでない帰国に望みを託すよりも、余生の安寧を求めて、やむを得ずロシア正教の洗礼を受け、同時に帰国を断念したのであった。

ただ、『北槎聞略』<sup>16)</sup>によると、この残留に対する二人の受け止め方は多少異なっていたようである。庄蔵が片足を失い、全くの「廢人」となり、光太夫らの帰国の実現を「大声をあげ小児の如くなきさけび」悲しんだのに対し、新蔵は洗礼により帰国の道が断たれたことを「悔るにかひなし」と語り、自らの運命を前向きに捉えようとしている。この二人の考え方の違いは、仙台漂流民たちへの接し方にも現れている。

庄蔵が彼らに自らの憂き目を語り聞かせているのに対し、新蔵は、現地

の日本語通訳トコロコフ<sup>17)</sup>とともに、彼らに帰化を勧めている。仙台漂流民たちのオホーツクからイルクーツクへの移動は、少人数ずつ3回に分けて行われているが、最初にイルクーツクに到着した先発隊3人のうち、善六と辰蔵は、新蔵たちの勧誘の甲斐あってまもなく洗礼を受け、ロシアに帰化している。しかし、儀平だけはそれを拒んでいる。その時の様子が『北邊探事』に記されている<sup>18)</sup>。

落つきて後 右トコロコフ善六に勧めし 其元等此國の人別に入るへし 然らば追而出世する事あるへし（中略）善六 辰蔵両人其三月ころと覚えて彼人別に入たり（中略）儀平壱人は最初より此事不同意にて其勧めに任せす ひたすら跡より来かゝる者ともを待居たり 夫故トコロコフ新蔵とか手前も不宜 尤同國同船なりし兩人の者にも自ら其中不快となりて暫の間は 心細くて暮らせしと云

人別に入るかどうか、すなわち帰化するかどうかを巡って仙台漂流民の間に亀裂が入っていることが伺えるが、実はこれは伊勢漂流民同士の亀裂も絡んだものであった。『北邊探事』の中に、帰国した仙台漂流民たちが、新蔵と庄蔵に対して抱いた印象が記されている箇所がある<sup>19)</sup>。

新蔵伊勢の産にて生得怜憐 極めて才覚者と聞ゆるなり 真実の性は薄く見ゆ 同郷に生れ 異国の同所に同住しながら 足脚さへ寒凍脱落せる庄蔵か扱ひ等 年來不人情の事と聞へ「イルコーツカ」先着の仙臺儀平等か至りしを喜ひ 不図も本國の人に出會 褒きを語て病を苦み新蔵か宿をはなれて 新識の仙臺人と同居して介抱を受け 終に死失せしは 憐にいとをしきおのこなり

二人の伊勢漂流民が決別した状態にあったこと、そして、その二人のうち、仙台漂流民の帰国組は庄蔵の方に同情していたことがうかがえる。また、伊勢漂流民の庄蔵と仙台漂流民で帰国組の儀平が親しかったことが読み取れる。おそらくイルクーツクに到着した早い段階で、新蔵に感化された善六ら残留組<sup>20)</sup>と、それを拒んだ帰国組4人との間で、大きな亀裂が生まれていたものと考えられる。

#### 4.2 新蔵の評判

帰国組4人が、善六をはじめとする多くの仲間を帰化へと導いた新蔵に対して、悪い心証を抱いたのは当然であろう。また、上記『北邊探事』は帰国組からの聞き書きによって作成されたものであるので、そこでの新蔵への評価は多少差し引いて捉える必要があると思われる。

では、新蔵は、実際にはどのような人物であったのであろうか。彼は、前述の通り、不本意な残留をすることにはなったものの、それを悲嘆しながら過ごすのではなく、積極的にロシア社会に溶け込みながら前向きに生きていこうとしていたことが多くの事実からうかがえる。日本語を教えて俸給をもらい、ロシア人女性と結婚もし、三人の子どもを授かっている。その後、その妻と死別した後も、別の女性と再婚を果たし、さらに一人の子どもを授かっている<sup>21)</sup>。また、その子どものうちの一人、ミハイロ・コロトウイギンは、父、新蔵の務めるイルクーツク国民学校で給付金をもらいながら、将来の通訳を目指して日本語を学んでいる<sup>22)</sup>。新蔵は、ロシア社会に完全に溶け込み、恵まれた生活を送っていたと考えられるのではなかろうか。

また、前述の通り、帰国組が彼のことを「不人情」と評しつつも、「生得怜憫」「才覚者」と認めていたように、仕事上の能力は高かったと思われる。ロシア語も堪能であつたらしく、『環海異聞』でも、次のように記

されている<sup>23)</sup>。

新蔵が日本学は、いろはより仮名書位出来候様子に御座候へども、オロシヤ言葉並よみ書の事もよく覺へ候趣にて、入組候掛ヶ合事、又は官邊の願書、其外の書物等も、彼方の文法の事成ば、自在に認取候様子也。

現に、彼は、その語学力や知識を活かし、イルクーツクの中学校長イワン・ミルレルと協力して『日本および日本貿易について』という書物を著している<sup>24)</sup>。そのミルレルは、1817年に『祖国の息子』という書物の編集長へ送った書簡で次のように述べている<sup>25)</sup>。

私の日本に関する記事は、生糸の日本人の九等官ニコライ・コロティギン（洗礼後の新蔵の名前 — 筆者注）が検討し、誤りも正してくれます。彼は教養のあるかしこい人物で、イルクーツクの中等学校で日本語教育をしています。彼は日本を隈なく旅行をしており、しっかりした詳しい知識をもっております。

彼のイルクーツクでの評価が高かったことがうかがえる。

また、彼のこの評判は安定的なものであったらしく、後々までも言い伝えられている。イルクーツク出身の作家 I.T. カラシニコフ（1797～1863）が、自身が学んだギムナジウムについて、1862年頃に記した次のような回想録がある<sup>26)</sup>。

1805年、イルクーツクにおいて、付属郡学校、教区学校を持つギムナジアが開校した。（略）学問の他にラテン語、フランス語、ドイ

ツ語のヨーロッパ諸言語、中国語と日本語のアジア諸言語が教授された。語学教師の中でもドイツ語教師であるルーテル派牧師イヴァン・ユリエヴィチ・ベッケル、アジア言語牧師である生粋のニコライ・ペトロヴィチ・コロトウイギンがとくにすばらしかった。

日本語教師コロトウイギンは嵐により日本からカムチャツカに流された。その後、イルクーツクに移され、正教に入信し、ロシアの姓を名乗った。ロシア語を習得し、子どもがいた。子どもたちはギムナジアで学んだ。つまり、幸せな家庭に恵まれ、非常に善良な人だった。

仙台漂流民の帰国組が日本で語った新蔵の人物評はともかく、イルクーツクにおいて彼は高い評価と信頼を得て、社会の中に完全に溶け込み、生き生きと暮らしていたように思われる。

#### 4.3 善六の帰化

一方、仙台漂流民の善六は、イルクーツクへ到着してわずか二ヶ月ほどで帰化している。伊勢漂流民の二人はそれぞれ片足を失ったり、熱病に罹ったりするなど、健康上の事情を抱えた上での消極的な帰化であったが、善六の場合には、各種史料を見る限り、そのような事情は見当たらない。また、伊勢漂流民たちが、イルクーツクに到着した頃は、自分たちよりも前にロシアに漂着した日本人で帰国できた者が一人もいないという先行きの見えない状況下にあったのに対して、仙台漂流民たちは、数年前に伊勢の大黒屋光太夫たちが無事に帰国を果たすという実績を作り、帰国が現実的なものとして考えられる状況であったこと等も考え合わせると、善六の帰化は、本人の明確な意志に基づく積極的なものであったと考えられる。その積極性は、他の漂流民たちへも影響を及ぼすほどのものであった。現に、善六たちよりも遅れてイルクーツクへ到着することになっていた後発

隊の八三郎、民之介に対し、彼はその到着を待たずに、帰化を促すような内容の手紙を送るなどしている<sup>27)</sup>。

では、善六を帰化へと推し進めたものは何だったのだろう。もちろん、日本語通訳トコロコフと新蔵による積極的な勧誘があったであろうし、単純にロシアという国に魅了されたということもあるかもしれない。しかし、最も大きかったのは、目の前にいる新蔵という成功モデルの存在ではなかっただろうか。ロシアで日本語を教えながら俸給をもらい、家庭も築き、安定した生活を送っている新蔵の暮らしぶりを目の辺りにした若い善六<sup>28)</sup>が、彼に憧れ、その本人からの勧誘に心を動かされても不思議ではない。また、ある程度の教養があったと思われる善六には、当地で成功できる自信もあったかもしれない<sup>29)</sup>。

#### 4.4 新蔵と善六の関係

ただ、善六は、帰化してすぐに新蔵のように活躍できたわけではなかった。善六たちがイルクーツク到着後すぐに亡くなった庄蔵に代わって日本語学校で働くことにはなったのだが、それはあくまでも新蔵の補佐役である教師補という立場であり、しかも俸給も支給されなかった<sup>30)</sup>。1809年にイルクーツク知事トレスキンがシベリヤ総督ペステリに宛てた報告書の中でも、善六は「助手キセリヨフ」と記されているため<sup>31)</sup>、十年以上もの間、日本語学校における彼の役割は新蔵の補佐的なものにすぎなかつたことがうかがえる。善六が正教師として認められたのは、1810年に新蔵が亡くなつてから5年も経過した1815年のことで、しかも、それは彼の日本語教師としての能力や功績が認められたからといふよりも、ゴロヴニン事件<sup>32)</sup>の解決に尽力したという功績が認められたからであった<sup>33)</sup>。

イルクーツクにおける新蔵と善六とでは、当初のトコロコフの言葉<sup>34)</sup>とは裏腹に、そしておそらく善六の思惑とも異なり、立場上の大きな違い

があったと考えられる。では、この格差はどこから生じたのであろうか。

まずは、単純に、古参の者に対する新参者の遠慮。また、10歳以上の違いがあったであろう年齢差。二人が出会った1796年の時点において、新蔵は38歳、善六は前述のとおり27歳ぐらいであったと推定される<sup>35)</sup>。出会った当初から、二人の関係性は明確であったと思われる。

そして、ロシアでの経験値の差。伊勢の神昌丸がロシアに漂着したのが1783年、仙台若宮丸が漂着したのが1794年なので、ロシア滞在歴に10年以上の開きがあり、それは当然、二人のロシア語運用能力の差として現れていたであろう。イルクーツクで暮らし始めたのも新蔵が1789年からであり、善六が1796年からであるので7年もの差がある。当地での人脈や、それを活用した処世等において、その差は歴然としたものであったと思われる。

これらの要素が二人の関係性を決定づけたのは仕方のないことであり、また、それが日本語教室における、正教師とその補佐役という立場の違いに反映されたのも当然のことであったと言えよう。

ただ、この二人の立場の違いは、日本語教室において、別の力関係を生み出し、それを支えていったのではないかと筆者は考える。その力関係とは、伊勢方言と仙台方言の優劣関係である。

1792年の開設以来、イルクーツクの日本語教室で教壇に立ってきたのは、庄蔵と新蔵であった。二人とも伊勢の若松村出身（現在の三重県鈴鹿市）である<sup>36)</sup>。善六たちが到着するまでの約4年間、イルクーツクで使われる日本語、そして日本語教室で教えられる日本語は、彼らの言葉すなわち伊勢方言のみであったはずである。伊勢方言が当地で日本語の規範として確立していたのは間違いあるまい。教室開設時から継続して勉強している生徒もいる日本語教室の中で<sup>37)</sup>、石巻方言話者の善六が補佐役として後から新たに加わったとしても、その規範が揺れることはなかったと思

われる。言うまでもなく言語教育には一定の規範が必要であるが、両方言のどちらにその優先権があったかは明らかであろう。

また、それは単に先後関係だけに因るものではなかったと思われる。もともと、伊勢漂流民は、仙台漂流民の話す言葉を標準的な日本語からは逸脱したものと見ていた可能性がある。大黒屋光太夫は、ロシア滞在中に『萬国奇語』<sup>38)</sup>の中の日本語を請われて修正しているが、そこに記されていた日本語のことを『北槎聞略』で「これは以前此方より漂流せし者どもに問て記せし由。(中略) 書中の語多く南部辺の言葉にてしかも下賤の語多し」<sup>39)</sup>と評している。もちろん、南部(現在の青森県東部地域)の言葉と仙台石巻の言葉という違いはあるが、両者は大まかな方言区分としては同じ東北方言あるいは奥羽方言に含まれる言語で、伊勢方言と比べたら共通点も多い。そして同じく過去の漂流民たちすなわち船乗りたちの言葉が反映されていると考えられる同資料の言葉に対する評価であるから、仙台漂流民たちの言葉に対して、伊勢漂流民新蔵が同様の評価をしていた可能性も十分にあり得よう。

いずれにしても、イルクーツクにおける新蔵と善六の関係性は、そのまま平行的に日本語における伊勢方言と仙台方言の関係性にも当てはめられていったのではないかと思われる。

## 5. レザノフ資料の日本語

### 5.1 レザノフ資料の編纂目的

ここで、レザノフが本資料を編纂した目的について考えてみよう。彼は、前にも引用した、科学アカデミー総裁 N.N. ノヴォシリツエフへ宛てた書簡の中<sup>40)</sup>で、次のように述べている。

日本語辞書および日本語の手引書を本状に添付して閣下にお送りしますので、それらを陛下にお届けいただきますよう謹んでお願い申し上げます。…（中略）…閣下、私の業績が未完成なのは承知しており、私はこれをそのような状態では刊行いたしません。これは私の情熱の成果にすぎません。たしかに、時がたてばこれらの情報も改善されるでしょう。ただ、少なくともイルクーツク日本語学校にとっては、学生たちが何か規則を習得するのを容易にするものとなるでしょう。

ここには、本資料の完成度に関する弁明と、本資料がイルクーツク日本語学校の学生たちにとって有益であるとの自負が語られている。つまり、本資料の編纂目的は前掲の『日本語辞書』序文に記されたような単なる世間への紹介に留まらず、イルクーツクの日本語学校への貢献もその一つとしてあったことがうかがえるのである。

## 5.2 善六の日本語観

本資料に記されている日本語は、レザノフ自身による漂流民たちの会話の観察によって得られたものも多少は含まれるのであろうが、前述したとおり、大部分においては、善六からの聴き取り、教授によるものであったと考えられる。

では、レザノフが善六から聴き取った日本語はどのような性質のものであったのであろうか。ここで重要なのは、善六が、その当時どのような日本語を話していたかということではない。彼がどのような日本語をレザノフに教えようとしていたかである。

善六は、イルクーツクにおいてもナデジダ号においても、複数の仙台漂流民が身近にいて、そのうちの帰国組とは険悪な関係にあったとはいえ、彼らとは旧来の言葉で語り合っていたであろう。したがって、石巻港を出

帆してから約10年の月日が流れていたとしても、石巻方言が失われていたとは考えにくい。しかし、イルクーツクでの新蔵との接点の多さから考えると、多少は伊勢方言の影響を受けていたとも考えられる。ただ、ここで考えるべきは、善六の日本語ではない。善六の日本語観である。レザノフが書物に書き記す日本語として、どのような日本語がふさわしいと善六が考えたかということである。

善六は、レザノフとの信頼関係、親密さから判断して、当然、レザノフの編纂意図を理解していたであろう。その意図には、前述したとおり、日本語教育、すなわち将来的な日本語通訳の養成に寄与するためというものが含まれる。善六は、イルクーツクの日本語教室において、また、新蔵との接触によって、自身の言葉である石巻方言が日本語教育にとって規範的な言葉でないという自覚を持っていたであろう。そのため、自身の石巻方言をそのままレザノフに教授したとは考えにくい。

また、善六の日本語観という点で注目すべきは、彼が、日本語の文字が読めたということである。『北邊探事』には、善六がイルクーツクに到着してすぐにトコロコフから帰化することを勧められるきっかけとなった出来事として次のような記述がある<sup>41)</sup>。

先年松前にて相渡されし御書付 新蔵手際にては悉く読わけかね  
其御趣意たしかに分りにくくてありしを、善六に読せければ よく読  
みとりて通じたりとぞ

ここに出てくる「御書付」とは、ラックスマンが、光太夫ら伊勢漂流民を送還した際に、日本から受け取った文書のことである。これを新蔵は理解できなかったが、善六は読み取ることができたということである<sup>42)</sup>。善六が日本語の読み書き能力を備えていたことの意味は大きい。文字を読める

ということは、彼が漂流する前に日本で書物を読んでいたことを示すからである。つまり、日本語の書記言語に接していたわけである。書記言語が、口頭言語に比べて規範的あることは言うまでもない。善六が、それに接していたということは、普段、自分が身近なところで話す言葉とは異なる日本語、多くの日本人がそれを介して意味を理解する日本語が存在することを、善六は多少なりとも認識していて、それがどのような言語かもだいたい把握していたはずである。新蔵の話す言葉に、自分の話す石巻方言とは異なる、書記言語に近い言葉を数多く見出していたかもしれない。

また、善六のそのような知識だけでなく、彼の日本語に対する姿勢にも注目したい。『通航一覧』<sup>43)</sup>には、1804年にロシアに漂着した慶祥丸<sup>44)</sup>の乗組員が、帰国後、幕府の取り調べに対し、ペトロパヴロフスクで出会った善六について語った記述が見られるが、その中で善六が当地に滞在している理由について「日本商買相初候得は、通詞致し、日本之地も踏み候積りにて、昨年より當所に残り候處（以下略）」と語っている。また、『日本沿岸航海および対日折衝記』に見られる、善六とリコルドのやりとりも興味深い<sup>45)</sup>。

余、茲に通詞キセレフの身上に關し、一言せんと欲す。子は日本人にして、其國の嚴禁たる外國の宗教を奉ずる者なるが、今回應対の時、子を隨へ往かんと欲す。固より是れまで日本へ贈る可き日本文の書簡は、子に命じ認めしめ、子は日本人より帰化したる露人として、常に公書等に記名せしめたれども、余り能く日本語に通ずるを以て、夫の慧眼なる日本人に看破せられたる時は、彼が身上に禍害あらん事を慮り、余は此事をキセレフに問ひしに、彼答へけるは、日本人、貴官等を全く捕縛せんとする事なれば、實に恐る可き事なれども、只某一人を捕ふる事ある可からず。今、某は日本人に非ず、願くば貴官、某を

随へ往きて通弁為さしめよ。

彼の通詞としての誇りや意気込みが感じられるのではなかろうか<sup>46)</sup>。善六は、おそらくロシアと日本との架け橋となるべく、十分に「日本」を意識した、「日本語」話者として振る舞ったのではないかと思われる。

## 6. おわりに

本資料に記されている日本語は、18世紀後期の石巻方言というよりも、石巻方言話者である善六が、伊勢方言話者である新蔵の影響を受けながら、そして標準的、代表的な日本語を多分に意識しながらレザノフに教授しようとした日本語が記されていると考えるべきであろう。もちろん、善六の中にも石巻方言と標準的な日本語との厳密な区別はできなかったであろうし、他の仙台漂流民の言葉も収録されているであろうから、本資料には、石巻方言も混在しているであろう。特に、音声的な特徴は、イルクーツクでの環境を考えた場合、意識しても容易に修正できるものではないと思われるので、石巻方言の特徴が比較的反映しているものと思われる。ただ、注意しなければならないのは、本資料に記載されている日本語が、これまで述べてきたような性格を有する以上、ある言語事象が当該時代の当該地域における「不在」の根拠にはなりにくいということである。歴史的資料は、本来、そのような性質のものではあるが、本資料の場合、そのことを特に意識する必要があるようと思われる。また、本資料に中央語形が記載されていたとしても、それは必ずしも当時の石巻方言がそれを有していたとは言い切れないということも意味している。

では、実際に、本資料の中の日本語がどれほど標準的なものであるのか、また、どれほど伊勢方言の影響を受けているのかということを明らかにし

なければならないが、残念ながら紙幅が尽きた。その点については別項を用意したい。

本稿により、開国の半世紀前に日本とロシアとの架け橋になろうとしたレザノフと善六によって作成された本資料の資料的価値が損なわれるわけでは決してない。彼らの著作を、その価値を傷つけることないよう慎重に扱い、そこから真摯に歴史的、方言学的価値を引き出すことこそ、後世に残された我々の仕事であろう。

## 注

- 1) 田中継根（2001）8頁の日本語訳参照。
- 2) 大島幹雄（1996）84頁、123～126頁等参照。
- 3) クルーゼンシュテルンの直系の部下レーヴェンシュテルンの1803年12月11日付の日記。加藤久祚（1993）104頁参照。
- 4) 「ニジネカムチャツク警備司令官P.I.コシェレフ少将に海軍士官の不服従を訴えるN.P.レザノフの手紙（1804年7月5日）」（藤原潤子訳）、平川新（2009）82頁。
- 5) 「N.P.レザーノフから皇帝アレクサンドル一世付属秘密委員会委員、科学アカデミー総裁N.N.ノヴォシリツエフへの書簡（1804年8月20日）」（渡邊聞・小野寺歌子訳）、平川新（2009）86頁。
- 6) 「世界一周航海に派遣されるI.F.クルーゼンシテルンの遠征隊およびN.P.レザーノフの日本使節団の名簿」（渡邊聞・小野寺歌子訳）、平川新（2009）63頁。
- 7) 「N.P.レザーノフからアレクサンドル一世への上申書。ナジェージダ号でのブラジルからカムチャツカへの航行と、日本へ出航するまでのそこでの活動について。（1804年8月16日）」（塩谷昌史・畠山禎訳）、平川新（2004）71頁。
- 8) 実際にレザノフの日本語での会話能力がどれほどであったのかは彼自身が長崎での交渉の様子を記した日記から、だいたいうかがい知ることができる。積極的に日本語を用いようとしてはいるが、会話が成り立っているとは言いがたい。  
 （1804年9月28日）大事な儀式が終わって、役人たちはずいぶんとくつろいできた。彼らに日本語でお礼を言うと、彼らも今までのやり方に反して、日本語で私の質問に答えてきた。私が正しく発音できないのを笑い、通訳たちがそのまちがいを直してくれた。
- （1804年9月30日）わたしもできるかぎり常套句は日本語で話した。「マンナナ ヨイノ ニボノ ファトノ」、つまり日本人は皆良い人だと、言ってみた。すると通訳の一人が、

「ミンナ」はロシア語でなんというか聞いてきた。私は「フェセ」と答えた。彼は突然「フェセ ラシア ドゥブリー リュージ（ロシア人はみんないい人だ）」と答えた。彼にお礼を言った。私たちは旧知の友だちのように親しくなっていた。（レザーノフ・大島幹雄（2000）61、77頁）

- 9) 大島幹雄（1996）132頁。
- 10) 羽仁五郎（1966）88~89頁。
- 11) 本資料については宮城県図書館蔵のマイクロフィルムを利用させていただいた。日本語訳は、浅川哲也・グリブ ディーナ（2014、2015）参照。
- 12) 『日本語学習の手引き』の序文には、「～日本語の認識が不可欠と考え、先ず必要な単語を集め、その後、同行者との会話から彼らの言葉に少しづつ慣れ、自分のために規則を定め、毎日それを修正し、いくつかの点で両方の言葉が類似していることに気づき、それを文法的な秩序に変えることに取りかかった。」（田中繼根（2001）130頁）との記述があるが、「先ず必要な単語を集め」たのは主に善六からであり、その後、他の漂流民たちとも会話を試みたものと思われる。
- 13) オホーツクからは、生き残った15名が3つの組に分かれ、それぞれにイルクーツクへと向かっている。善六は、儀平、辰蔵とともに先発隊であった。『環海異聞』卷二、大友喜作（1972a）153頁。
- 14) 船頭は大黒屋光太夫。1782年に伊勢の白子から江戸に向かう途中で嵐に遭遇し、翌年、アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着した。漂流民たちは途中で多くの乗組員を失いつつも10年以上の年月をロシアで過ごした。生き残った乗組員のうち、庄蔵と新蔵はギリシャ正教の洗礼を受け、イルクーツクに留まったが、光太夫と磯吉、小市は日本への帰国を果たした（但し、小市は根室への上陸直前に死去）。この帰国は、遣日使節アダム・キリロヴィッチ・ラックスマンに伴われたものであったが、この際に、彼は本文冒頭で述べた日露間の通商交渉に繋がる信牌を受け取っていた。
- 15) 「シベリア総督イヴァン・オシボヴィチ・セリフォントフより商務大臣ニコライ・ペトロヴィチ・ルミヤンツエフ伯爵宛の文書。イルクーツク国民学校日本語生徒の処遇について（1805年2月13日）」。（オイドフ・バトバヤル、寺川恭輔 訳）。「イルクーツク社会保護局よりシベリア総督宛の報告（1805年6月1日）」（オイドフ・バトバヤル、寺川恭輔 訳）。平川新（2009）109、121頁参照。
- 16) 桂川甫周が、帰国した大黒屋光太夫からの聞き書きにより作成した漂流見聞録。1794年成立。杉本つとむ（1993）77~105頁、宮永孝（1988）32~44頁参照。
- 17) 光太夫たちが漂着する以前に、同じく日本から漂流しイルクーツクで暮らしていた南部藩出身の漂流民から日本語を学び、それを身につけていたロシア人。ラックスマンが光太夫送還のために日本を訪れた際に、通訳として同行している。
- 18) 大友喜作（1972b）251頁、北海道古文書サークル（2011）198頁。

- 19) 大友喜作（1972b）257 頁、北海道古文書解読サークル（2011）205 頁。
- 20) 仙台漂流民 16 名のうち、帰国する者 4 名、既に病死した者 3 名を除いた 9 名がロシアに生きて残留している。そして、『北邊探事』によると、帰国組がペテルブルグを出港する 1803 年の時点で、善六、辰蔵、八三郎、民之介の 4 名が既に帰化している。大友喜作（1972b）233～235、253～255 頁、北海道古文書解読サークル（2011）177、199～202 頁参照。
- 21) 大友喜作（1972b）257 頁、北海道古文書解読サークル（2011）204～205 頁。
- 22) 「イルクーツク国民学校で 1805 年に日本語を学ぶ生徒の名簿」（オイドフ・バトバヤル、寺川恭輔 訳）。平川新（2009）122～123 頁。
- 23) 大友喜作（1972a）169 頁。
- 24) 『日本および日本貿易について。および日本諸島の最新なる歴史的、地理的記述。日本生れの参考会員ニコライ・コロトウイギンにより考究され、イワン・ミルレル刊行。サンクトペテルブルグ・エヌ・グレッチ版・1817 年刊』。また、彼は、ドイツの東洋学者クラプロートに日本語を教え、彼が林子平の『三国通覧図説』を翻訳するのを手伝ったともされている。加藤久祥（1993）66 頁、杉本つとむ（1993）673～674 頁、高野明（1994）139 頁参照。
- 25) 杉本つとむ（1993）673～674 頁、高野明（1994）140 頁参照。
- 26) 「I.T.カラシニコフ「あるイルクーツク住民の回想」より（1862 年頃）」（斎藤由佳・小野寺歌子 訳）、平川新（2009）108～109 頁。
- 27) 実際に、八三郎、民之介の二人は、イルクーツク到着後すぐに洗礼を受け、帰化している。ただ、この時に出した手紙は、他の後発隊の漂流民たちの目にも留まるところとなり、帰化残留組と帰国組の亀裂の一因になったと考えられる。大島幹雄（1996）54～55 頁、大友喜作（1972b）253～255 頁、北海道古文書解読サークル（2011）177、200～202 頁参照。
- 28) 善六は 1793 年の石巻出港時に 24 歳であったから、当時は 27 歳くらいであったと考えられる。北海道古文書解読サークル（2011）の「注釈（平田水哉執筆）」260 頁参照。
- 29) 『北邊探事』には、ラックスマンが松前で渡された書付を、新蔵よりも善六の方が見事に判読したエピソードが記されている（後述）。また、トコロコフは、その能力をもって、善六が新蔵よりも成功できる可能性を示している。大友喜作（1972b）251～252 頁、北海道古文書解読サークル（2011）197～198 頁参照。
- 30) 播磨磨吉（1922）798 頁、石垣宏（2003）31 頁参照。
- 31) 木崎良平（1997）228～229 頁。
- 32) 1811 年にロシア軍艦ディアナ号の艦長ヴァシリー・ミハイロヴィチ・ゴロヴニンが国後島で松前藩に捕縛され、抑留された事件。彼を釈放するためのロシアと日本との会談が 1813 年に函館で行われたが、善六は、その席に通訳として参加した。
- 33) 播磨磨吉（1922）799 頁、木崎良平（1997）228～229 頁参照。
- 34) 『北邊探事』によると、トコロコフは善六に対し、「此地の人別に加はりなば 吾が近例もあれ

- ば 紿銀四百枚には至らずとも 三百枚は賜るべし」と甘言を弄している。大友喜作（1972b）251 頁、北海道古文書解読サークル（2011）198 頁。
- 35) 新蔵は神昌丸が伊勢白子を出港した 1782 年の時点で 24 歳であった。木崎良平（1991）54 頁参照。
- 36) 木崎良平（1991）54 頁参照。
- 37) 1792 年の日本語教室開設時に入学した 3 名の生徒のうち、アンドレイ・アムプロソフと、イヴァン・ミロノフの 2 名は、1796 年時点でもまだ在学中であった。「シベリア総督イヴァン・オシポボヴィチ・セリフォントフより商務大臣ニコライ・ペトロヴィチ・ルミヤンツエフ伯爵宛の文書。イルクーツク国民学校日本語生徒の処遇について（1805 年 2 月 13 日）」。（オイドフ・バトバヤル、寺川恭輔 訳）。「イルクーツク国民学校で 1805 年に日本語を学ぶ生徒の名簿」（オイドフ・バトバヤル、寺川恭輔 訳）。平川新（2009）109~110、122~123 頁参照。
- 38) P.S. パラスの『欽定全世界言語比較辞典』のこと。ロシア語の基礎単語 273 語に対応する世界の 200 言語の単語をキリル文字で示したもの。日本語も含まれているが、そこには 18 世紀のロシアへの日本人漂流民の言葉が反映されている。村山七郎（1965）215~225 頁参照。
- 39) 『北槎聞略』巻九 雜載。杉本つとむ（1993）436~437 頁。
- 40) 前掲資料「N.P. レザーノフから皇帝アレクサンドル一世付属秘密委員会委員、科学アカデミー総裁 N.N. ノヴォシリツエフへの書簡（1804 年 8 月 20 日）」（渡邊聞・小野寺歌子 訳）、平川新（2009）88 頁。
- 41) 大友喜作（1972b）252 頁、北海道古文書解読サークル（2011）198 頁。
- 42) 後に、ゴロヴニン釈放に尽力したリコルドは日本との交渉において、ロシア側文書を善六に翻訳させている。注 45 参照。その精度はともかく、彼に読み書き能力があったことは間違いない。
- 43) 大学頭林復斎らが編纂した 1566 年から 1825 年頃までの対外関係史料集。当該箇所は『通航一覧』巻三百十九。林慥・宮崎成身（1940）第八 196 頁。
- 44) 船頭は陸奥国出身の繼右衛門内。1803 に函館の臼尻を出港した後、嵐に遭遇し、翌年、北千島のボロムシリ島に漂着した。漂流民たちは、その後、ロシア人に救助され、ペトロバヴロフスクに連れて行かれ、そこで、レザノフの判断によりナデジダ号を下船させられ当地に滞在していた善六と出会った。木崎良平（1991）102~105 頁参照。
- 45) 木崎良平（1997）225~226 頁。
- 46) 大島幹雄（1996）187~212 頁にも同様の見解がある。

## 引用文献

浅川哲也・グリブ ディーナ（2014）「ニコライ・レザノフ『日本語理解の手引き』（邦訳）」（『人文学報』、首都大学東京人文科学研究科）

- 浅川哲也・グリブ ディーナ（2015）「ニコライ・レザノフ『露日辞書』(邦訳)」（『人文学報』、首都大学東京人文科学研究科）
- 石垣宏（2003）「若宮丸漂流民の足跡」（『世界一周した漂流民』、石巻若宮丸漂流民の会）
- 江口泰生（2010）「レザノフ資料の日本語」（『語文研究』108・109号、九州大学国語国文学会）
- 大島幹雄（1996）『魯西亞から来た日本人 漂流民善六物語』、廣済堂出版
- 大友喜作（1972a）『北門叢書 第四冊 環海異聞』、国書刊行会
- 大友喜作（1972b）『北門叢書 第六冊 北槎異聞・北邊探事』、国書刊行会
- 加藤久祚（1993）『初めて世界一周した日本人』、新潮社
- 木崎良平（1991）『漂流民とロシア』、中央公論社
- 木崎良平（1997）『仙台漂民とレザノフ』、刀水書房
- 杉本つとむ（1993）『北槎聞略 影印・解題・索引』、早稲田大学出版部
- 高野明（1994）『日本とロシア』、紀伊國屋書店
- 田中継根（2001）『露日辞書・露日会話帳』、東北大東北アジア研究センター
- 羽仁五郎（1966）『クルウゼンシュテルン日本紀行 上巻』（改訂復刻版 初版1931年）、雄松堂
- 播磨檜吉（1922）『露国に於ける日本語學校の沿革』（『史學雜誌』33-10、史學会）
- 林慥・宮崎成身（1940）『通航一覧 第七 第八』、泰山社
- 平川新（2004）『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係 第1集』、寺山恭輔・藤原潤子・伊賀上菜穂・畠山禎編、東北大東北アジア研究センター
- 平川新（2009）『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係 第4集』、寺山恭輔・畠山禎・小野寺歌子編、東北大東北アジア研究センター
- 北海道古文書解読サークル（2011）『古文書解読叢書十一 解説『北邊探事』』、北海道古文書解読サークル
- 村山七郎（1965）『漂流民の言語』、吉川弘文館
- レザーノフ・大島幹雄（2000）『日本滞在日記』、岩波書店

## 付記

- ・ 本研究は、2017～2019年度科学研究費助成事業基盤研究（C）（課題番号 17K02774）の助成を受けている。
- ・ 本稿は、奇しくも伊坂先生の故郷である伊勢の漂流民と、先生が学生時代を過ごされた仙台の漂流民の出逢いを扱うことになった。本論でも触れたが、出逢うはずのなかった者たちの異国での邂逅。人の出逢いの

妙を感じずにはいられない。

以前、私が資料収集のために伊勢若松を訪れたことを先生はたいへん喜んでくださいました。就任以来何かと気に掛けてくださったように思います。長い間ありがとうございました。先生との出逢いに感謝します。